野犬出没

総科周辺
『仁義なき戦い』

平和そのものの総科の一角で，今まさに血みどろの戦いが繰り広げられようとしていた・・・。

おめー，この辺の者じゃねえな。

Shall we dance!!

敗者には誰も見向きもしない・・・・・。

生きてるってすばらしい・・・・・。

争いは無益じゃ。

畳の上で死にたかった・・・・・。

冷たくて，し・あ・わ・せ～♡

No. 51

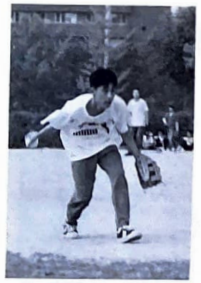
平成８年９月１日発行

飛翔

広島大学総合科学部報

グラビア１：
総科周辺「仁義なき戦い」

グラビア２：
'96 Yukata Matsuri



上３枚：ソフト大会の模様

Contents Design: 渡邊忠信

Contents

1 巻頭言
「総合科学研究プロジェクト事業のスタート
－総合科学部の新しい試み－」生和秀敏（総合科学部長）

2 特集１：まちづくりという生き方
カタチは見えないものだけど、コツコツと創ってます

8 社会からの声
「都市づくりの折り返し点を迎えて」讃岐照夫（東広島市長）

10 特集２：独断と偏見の総合科学入門－環境問題編－
ルール無用，コース無視，単なる無知，
でもやるときゃやるのだ！

16 よりよい授業をめざして
「学んで総科，教えて『そうか？』」大山茂之（外国語コース助教授）

18 特集３：総科オリキャンのゆくえ
賛否両論：「オリエンテーション」は一体どこへ？

24 特別寄稿：生物圏科学研究科10年の歩み
武森重樹（広島大学名誉教授）

27 過去５年間の就職状況を振り返って
藤井博信（前就職委員長）

28 エッセイ
「教養ゼミを担当してみて」石倉康次（社会科学コース助教授）
「日はまた昇る？」井上研二（外国語コース教授）
「どうせこの世は、そんなとこ」柏戸義道（事務長補佐）
「江田島に行ってきました」竹本佳代（教養教務係）
「就職活動奮戦記」武田淳子（物質生命科学コース４年）
「西条の未来」阿戸慎一（１年）

34 研究室紹介
高橋憲男研究室（人間文化コース）
奥村和久研究室（社会科学コース）
山縣敬一研究室（数理情報科学コース）
田村剛三郎研究室（物質生命科学コース）

38 卒論テーマ紹介
42 お初にお目にかかります－新任教官紹介－
44 人事異動のお知らせ
46 読者からの手紙
48 編集後記

巻頭言

総合科学研究プロジェクト事業のスタート

－総合科学部の新しい試み－

生和秀敏
（総合科学部長）

かつて私がコース委員長の時，飛翔に次のような文章を書いたことを覚えている。『慶応大学藤沢湘南キャンパスの爆発的といえる人気は，「複数の学問分野にまたがる学際的な領域や既存の学問的枠組みを越えた新領域に対する知的関心を育成する」といった20年前の総合科学部の教育理念が今なお魅力に溢れたものであることを改めて物語っている。いま問わなければならないのは，人が去り時が移り変わるにつれ，新しい学部を自分の手で創りあげるというこころざしが次第に衰退し，組織としての硬直化が進み，新しい試みを忌避する風潮が蔓延しつつあることである。総合科学部は，絶えず創設の理念と新しい状況とを勘案しながら，時代を先取りした学部としての自己改革を続けて行かなければならない。近々に予想されるコースの再編成問題は，既存のコースをどう編成し直すかといった組織次元だけで議論するべきではない。たとえば，真の総合科学の名に値するプロジェクトを募り，時限を定めて，そのプロジェクトに人材と予算を大幅に投入するなどといった方法も考えられる』。

あれから３年，渡部前学部長と永井前コース委員長のご努力もあって，懸案であった総合科学研究プロジェクト事業が本年度からスタートできることになった。これによって総合科学部は，文系と理系にまたがる共同研究をはじめ，さまざまな形での総合的・学際的研究を育成・推進する制度が整備され，複数のディシプリンにまたがる研究や総合科学部にとって推進したい研究，あるいは総合科学の創造に向けた研究に着手できる条件が整ったことになる。単年度予算1,500万円という事業費は，総合科学部の総予算からみれば決して十分なものとはいえないかもしれないが，総合科学部の構成員自らの意志で新しい試みに踏み切れたことをとても嬉しく思っている。５月８日に開かれた飯島元学長の叙勲祝賀会の席上，元学部長の天野先生と飯島先生にこのことをお話しした。総合科学部を愛することにおいては人後に落ちない天野先生からは，『それはよかったなあ。総合科学部らしい研究を領域を越えてやらにゃーいけんということは，わしが前からいっとったろう。ぜひしっかりやれーよ。』と励まされた。今堀初代学部長とともに学長として総合科学部の創設に努力された飯島先生は，『学部の皆さんにその気持ちがあるかぎり，総合科学部はきっとよくなりますよ。』と喜んでくださった。

端緒に就いたばかりの総合科学研究事業に過大な期待は禁物かもしれない。しかし，総合科学部のレゾン・デートル（存在理由）を確かめる場として，総合科学部再生の切り札として，さらに学生をも巻き込んだ新しい大学教育の試みとして，ぜひともこのプロジェクト事業を根付かせ発展させたいと考えている。

特集1

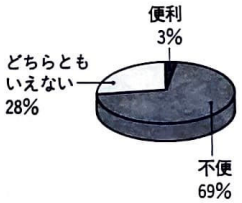
まちづくりという生き方

1：西条に対する広大生のホンネ

－学生アンケート集計結果－

様々な団体の手によって，学生の西条に対する不満が調査されている。もちろん飛翔でも，過去に数回ほど西条のまちづくりについて特集を組み，学生にアンケート調査を行っている。だが，これらの多くは「西条がいかに不便で，学生がそれによっていかに不利益を被っているか」という点にのみ力が入れられていたように思える。今回は，本当に学生は不満に思っているのかどうか，などを探ってみた。調査対象は，総合科学部08生104名，総合科学部及び法学部07生61名，合計165名の広大生である（このうち法学部の学生は，クラス分けの都合上総合科学部の学生と一緒に英語の授業を受けていたもの）。

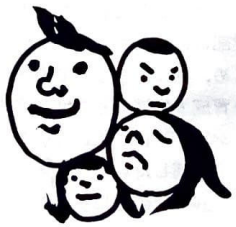
西条は生活するのに便利か不便か



この質問には「何をもって便利とするか曖昧だ」という反論も寄せられた。そして結果にも，当然ながら人の感じ方によって解釈も様々だ，という事が現れている。

不便だと思う理由の欄には，これまでのアンケートでも必ず出ていた「店が少ない」「交通の便が悪い」「道が悪い」「街灯がない」「遊び場がない」といったものが列記されていたが，どちらとも言えないと思う理由の欄には，これらの不便さと同時に「生活には困らない程度に便利」という事が書かれていた。実際には生活に困らない程度のインフラは整備されていて（中には『田口は不便』といったもっともな意見もあったが）そのうち慣れてしまうのだが，みんなが不便だと言っているので，自分も何となく不便だと言っているだけなのかも知れない。

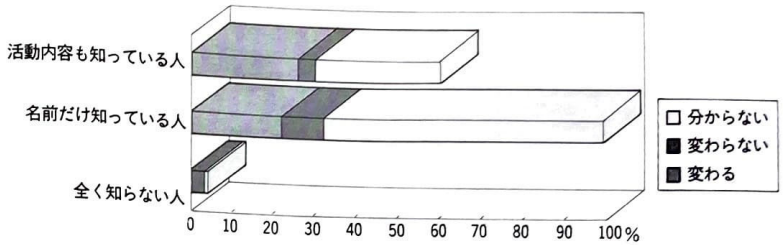
不便だと思う理由	（複数回答）
店が少ない	47
交通の便が悪い	43
道路事情が悪い	19
街灯がない	16
坂が多い	16
広島市まで遠い	9
遊び場がない	8
映画館がない	8
物価が高い	5
その他	53



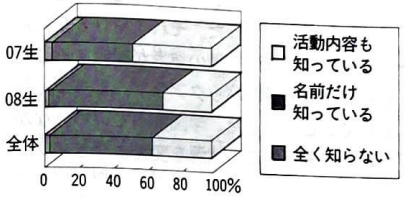
MUSEについての認識

広大生協の下に発足した，学生によるまちづくりを目指した団体，ＭＵＳＥ（ミューズ）。今回の特集でもメインとなる，ギリシャ神話の音楽の女神の名を冠したこの団体について，その認知度を調査するとともに，彼らの活動によって街が変わると思うか，という質問をしてみた。

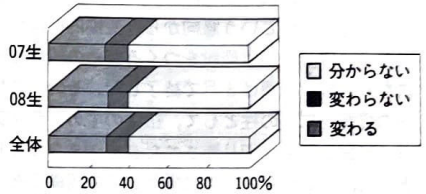
認知度については，08生の７割近くが「名前だけ知っている」と答えているのに対し，07生が約半分の割合で「活動内容も知っている」と答えているのが目につく。これは，昨年から今年始めにかけて活発に活動していたのだが，４月に入って組織変革があったため活動が鈍くなり，新入生にはやや印象が薄い事に起因するようだ。また，街を変える期待度については07，08生ともに６割程度が「わからない」，３割が「変わる」，１割が「変わらない」であった。



ＭＵＳＥの認知度

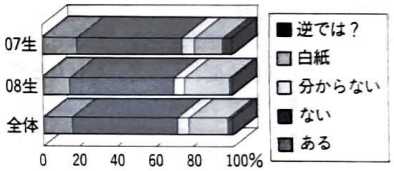


ＭＵＳＥが街を変える事への期待



地域が学生のためにしてくれている事

これを感じた事が「ある」という人は16%程度で，「ない」が55%という結果が出た。「わからない・白紙」は27%，「むしろ学生が地域に貢献すべきだ」という意見が２%だった。「ある」と答えた人の具体的事例は，「西条駅－大学間のバスが多くて便利」３名，「掃除」３名，「安い定食屋がある」２名，「学割がきく」２名，「アパートを造る」２名，中には「広大生には化粧品を10% OFF にしてくれる」という答もあった。

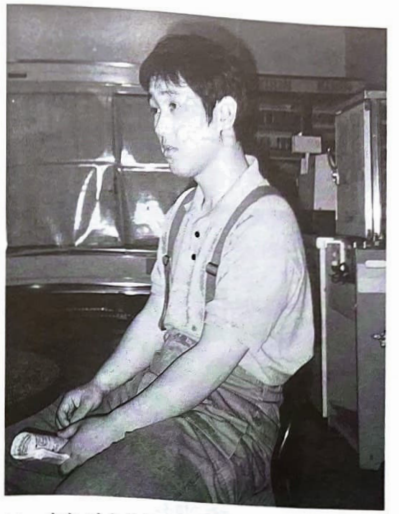


大半の学生は，「西条は店もなく交通機関も未発達で不便だ。ＭＵＳＥなんてのもいるけど，何やってるのか知らないし，どうなるかなんてわからない。地域が学生のためにしてくれている事なんて感じない」という事のようだが，４年間かそこらの寄留者でしかない広大生の意識としては，こんなものだろう。教官や事務官になると東広島市に住んでいない人も多く，さらにひどいのではないかと思われる。そんな中で，ＭＵＳＥを始めとする学生，教官有志は何を目的として何をしているのだろうか。

2：あなたの知らないMUSE

95年9月頃，西条在住の方から広大生協に「土地を活用しないか」という話がきた。学生向けの施設にしたいという意向から，生協内に学生が主体的に組織をつくった。それがＭＵＳＥ発足のきっかけ。最初は施設をつくるための組織だったが，施設の候補地を他の業者が開発することになり，施設構想は3月で終了した。その後のＭＵＳＥは学生生活のバックアップ，まちづくりへの提言を二つの柱として，広大の中のメディア局としてデビューした。学園都市といわれながら，市民と学生が切り離されたまま，まちづくりが行われてきた。この状況を変えようとスタートした，街と学生の接点の場としての組織である。

ＭＵＳＥの学生代表，上田浄介さん（総合科学部人間文化コース3年生）に話を聞いてみた。上田さんは95年9月当初からＭＵＳＥに参加している。彼がＭＵＳＥに参加したきっかけについて，「先輩が話を持ってきて，生協の人と会って話を聞いてみた。もともと都市計画に興味があって面白く感じて参加した。神戸にいたときにいろんな施設を見てきたが，それを生かしたかった。しかし，何よりの魅力は施設が実現できるということだった。」と語る。施設構想が休止することになり，ＭＵＳＥは再スタートをきるわけだが，それについては，「何をすればいいのか迷った。でも，ニュースペーパーなどを出して考えてみると，自分達の意見をきっちりと街に表現し，伝えていく事が重要だという事を実感した。そうしたつながりを通し，学生も街も活性化することが，街づくりにつながるのではないか。そう思って新たな方針のもと活動を始めた。」と，語ってくれた。しかし，問題もある。「問題は，なかなか人が集まりにくい事。」上田さんはそう言う。ここには，広大生のまちづくりに対する意識が反映されている。「それぞれ不満はあると思う。しかし，半年もすれば慣れてしまって大学生活とはこんなものかと思ってしまう。僕は与えられた遊び場に満足したくないと思う。」ＭＵＳＥはこうした意識を変えていきたいのだろう。しかし，「まちづくり」という漠然としたテーマでは意識の喚起は難しい。そこで，彼らはイベントなどを通して学生が楽しんでいくなかで，私達が動くことで街も動いていくことを実感して欲しいのではないだろうか。最後に彼はこう語る。「西条の人口は10万人で，広大生は1万5千人，学生がどんなことをしても，街がひとつも変わらないなんてことはない。まちづくりというのは，はっきりいえば僕らが楽しむこと。僕らが活気を帯びれば，街も活気を帯びる。だから，大学生だけで楽しむのではなく，いろんな所で活気のあることをしていきたい。それに加わってくれる人はみんなＭＵＳＥ。ＭＵＳＥはユニットなんよ，結局は。組織なんてのは“何かやりたい人”のための器で，何かやりたいけど一人ではどうしようもなかった人たちが，知り合えて一緒に何かやれる，市民も学生も関係なしに。そういうものにしていきたい。」



＊　＊　＊

ＭＵＳＥは学外に対しても積極的に活動している。彼らと会合を持っているＪＣ（東広島青年会議所）の村若理事長はこう語る。

「ＭＵＳＥの機関紙第1号の発行をきっかけとして，ある人の紹介で彼らと知り合った。第1号の内容については，施設の具体案そのものよりも，学生の要望がポジティブな形で出てきた事が素晴らしいと思った。これまでに数度の会合を持ったが，ＪＣは非営利組織なので，娯楽施設の建設推進という面では協力しにくい。かと言って抽象的なまちづくり論議を続けるにも限界がある。ＭＵＳＥに対しては，今後は施設建設にこだわらず，学生の声を活かしたイベントや交流の場づくりなどを期待している。そういう形の活動ならＪＣも応援できるのではないかと思う。

私たちとしては，彼らと酒を酌み交わしながらいろいろ語り合う事も，学園都市づくりの一端なのかも知れないと思っている。学生さんも，東広島にも『兄貴』がいる，くらいのつもりでつきあって欲しい。学生は4年間しか東広島にはいないわけだが，街と触れあう機会をぜひとも多くして欲しい。たかが4年間，されど4年間。同じ4年間なら，いい思い出をたくさん作って卒業して行っていただきたい。戦前日本に留学していた中国の偉い人が，日本と聞いてまず思い出すのは下宿のおばさんの顔だったという。そういう関係を作っていきたい。」

＊　＊　＊

また，一緒にインターネットの事業を進めようとしているカントリー・インターネット社のみなさんにお話を伺ってみた。

「当初，ＭＵＳＥとＪＣがやっていた町おこし会議の議事録を読んで，ＭＵＳＥの草の根的な運動に共鳴した。それで第2回の会議に出席して，そこからつながりができた。彼らは，自分たちの夢の街を創るという構想をまずインターネット内に作ってみたいと言って来た。私達もインターネット上でまちづくりを行っている。マップシステムといって，活きのいい情報を地図の中に埋め込むものだ。情報はup-to-dateで更新していく。湘南の藤沢を皮切りに東広島や他の地域へと全国規模で展開していく。そのコンセプトは『地元の人がそれをいかに使えるか』という事だ。この辺で，地域と学生の人的ネットワークを作り上げて行こうというＭＵＳＥの草の根の活動と共鳴した。技術面は私たちが，マンパワーはＭＵＳＥが提供する，またどちらもメディアだから情報面でもお互い融通し合う，そういう関係ができつつある。」

＊　＊　＊

僕は2度ばかりＭＵＳＥの会議を見学する機会に恵まれたが，活気と熱気をはっきりと感じることができた。施設計画にも驚きと魅力を感じるが，現在のメディア局としての息の長い，草の根的活動にも期待できると思う。みんなが「楽しむ」ことを通して街をよりよいものにしていこうとする姿勢に非常に共感を覚えた。

（文責：松川祥広）

3：草の根のネットワークづくり

まちづくりをしようといっても，具体的にどんなことをやればいいのか分かりにくいと思う。そこで，高美ヶ丘ニュータウン在住の日下部真一先生（自然環境研究コース）に高美ヶ丘での活動などについて伺ってみた。

Q：どういうきっかけで始めたのか？
A：高美ヶ丘は，広島大学と同様に賀茂学園都市構想の一環で，私が住んでいる７丁目の場合だと２年位前から人が住み始めました。何もない所から街をつくり出す，いわゆるゼロからの出発だったので，自治会をつくる必要がありました。そこで自分が中心となり，まわりの人たちに呼びかけて自治会を設立し，運営を始めたのです。

活動の様子

Q：何をやってきたのか？
A：自治会をやって２ヶ月目で集会所の運営を任された時，私には「集会所とは奥様やおばさんたちがアルバイトをするような所」という先入観がありました。そのようなものにはしたくなかったので，集会所と７丁目の大きな公園を利用して，自治会とは別に子どもたちの文化活動（文庫）や，お父さんたちも気軽に集まれるような談話会をやり始めたのです。談話会の初回講演を私の娘が通う幼稚園を経営する難波元実さんにたまたま依頼すると，彼もサロン大学というまちづくり活動をしており，すっかり意気投合しました。これを機に，難波さんたちと街づくりについて話し合い始めました。

Q：活動の目的は何か？
A：文庫の目的は大きく言えば，子どもたちの教育になります。伊藤忠財団から百万円の助成金をもらい本を備え，お母さんたちの中から有志を募って活動しています。子どもはおろか親までも，高度経済成長のおかげか感受性が育っていません。また，子どもたちにテレビやファミコンなどの映像文化のみでなく，自然や本（特に絵本，童話）の楽しみにも目を向けて欲しいと思っています。一方，談話会をつくった目的は，何もないゼロから街づくりをするのだから，とにかくわいわいがやがやする，ということです。象徴的に言えば，人と人とのネットワークを形成することなんです。だから，活動の中で東広島の街の歴史と文化と自然について学んだり，何でもありなんですね。

Q：学生と地元の方々との関係のあり方についてどう思うか？
A：総科は３年前に引っ越してきたばかりで根がないので，これから根を作り，張らなければならないでしょう。そのためには，地元の市民の方々の心強い支援が必要なわけで，そうした方々と交流していかなければなりません。でも実際には交流の場はなかなかないので，広大の学生も教職員も交流の場を自分達の手で作っていく必要があります。それに，地元の方々と接する上で，よい意味で郷に入っては郷に従えという態度を忘れてはいけないと思います。

現在，日下部先生は自治会の運営を交代されたそうですが，人と人とのネットワークの基盤は，しっかり築かれたようです。私たち学生はハード面での活動はやりにくいですが，あまりハード面での街づくりに固執せず，既成の集まりに気軽に参加するといった，ソフト面での街づくりを促すことで，地元の方との交流ができるのではないでしょうか。

（文責：渡辺裕士）

4：文化の薫るまちづくり

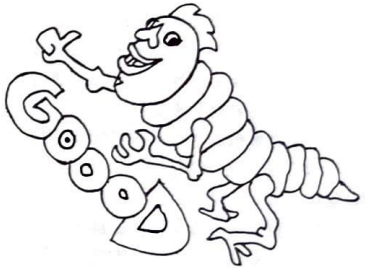
―ある音楽サークルの場合―

室内合奏団団長　島　崎　尚　子（外国語コース３年）

東広島市と広島大学の音楽サークル（音楽協議会加盟）との交流の中心となっているのはフェニックスコンサートでしょう。このフェニックスコンサートは，①東広島市民との音楽を通じた交流，②東広島における活動の基盤づくり，③東広島市民へのサークルのアピール等を目的としており，第１回目は1983年10月９日(日)に東広島中央公民館にて行われました。広島大学のサークルだけでなく，東広島で活躍中の様々な音楽クラブが出演することもあります（84年東広島混声合唱団，89・91年磯松中学吹奏楽部，96年東広島ウィンドアンサンブル）。

その他の東広島市との交流は，各サークルレベルで行われています。たとえば，吹奏楽団は毎年，東広島市内にある小学校を訪ねて音楽教室を開いて，小学生に親しみやすい曲を演奏しており，特にアニメ曲などは人気があるようです。また，その小学校の校歌を編曲して演奏したり，楽器紹介をして楽器に興味を持ってもらうなど，その内容は盛りだくさんです。交響楽団の場合には，同じような音楽教室を開くほか，定期演奏会を東広島市でも開催しています。室内合奏団は東広島市と毎年の交流というものを特には持っていませんが，公民館などからの依頼があると訪問演奏をすることがあり，昨年度は（東広島市内ではありませんが）熊野西公民館にてミニコンサートを行いました。定期演奏会を広島市内のホールで行うサークルが多い中，交響楽団以外にも東広島市で定期演奏会を開催するサークルがあります。ギタークラブ，マンドリンクラブなどがそうです。

昨年の広島大学の統合移転の完了に伴い，各サークルごとに東広島市民と積極的に交流を図る動きも出てきました。合唱団が今年初めて，広島で行う定期演奏会とは別に，東広島市でサマーコンサートを行うというのがその一例でしょう。これから，音楽を通じてもっとお互いの交流を深めていきたいと思っています。



＊　　＊　　＊

これまで飛翔では，何回か学生と西条との関りについて特集を組んできた。だが，この特集も含めて，どれもこれも何もわかっちゃいないのである。学生が「西条には何もない」と言うのは，何も見ていない証拠だ。我々が何かを見たというわけではないが，ここに登場された人々，されなかった人々の持つ熱気だけは感じられた。もっと動き回れば，さらに広い世界が現れただろう。今回の取材では，「一緒に西条を素晴らしい街にしましょう」といった甘っちょろいセリフは聞かれなかった。感じたのは「さあ，かかって来い！」というような，一種の気迫だったように思える。

「自分にはできない」，「忙しいからほっといてくれ」という人も多いだろう。もちろん能力も問われる世界だが，それより重要なのは“この地に住む人々や文化をどれだけ好きになれるか”という事だろう。ごく当然の事に過ぎないが，何をするにしてもそれが一番大事なのだと思う。

（文責：渡辺忠信）

都市づくりの折り返し点を迎えて

讃 岐 照 夫(東広島市長)

東広島市は，昭和48年２月に国立大学広島大学が西条地区への統合移転を決定したのを契機に，これを核として賀茂学園都市の建設を目的とし，また体質の強化と行政の高度化を図るため，昭和49年に西条町・八本松町・志和町・高屋町の４町が合併し，県内で12番目の市として誕生いたしました。

当時の賀茂地域は，古くから穀倉地帯として県内有数の農業地帯であったころに内陸型工業の立地が著しく進み，更には東洋ニュータウンの住宅建設も進むなど，広島地区工業の受け皿的機能とベッドタウン的機能が現れ始め，豊かな自然環境の中で開発促進への傾向が強まったことで，生産活動が活発化し，定住人口も増えはじめたところでありました。

この地域の最初の開発プランとなった賀茂学園都市開発構想では，賀茂地区を自立型として，その果たす役割を①良好な住宅地と充実した生活圏の形成②積極的な教育研究機能の集積③内陸工業の充実④レクリエーション機能の強化と考え，この地域のまちづくり戦略として，学園機能の一層の充実，豊かな自然の保護，歴史的・文化的風土の維持・保全，地場産業の育成等，これらを総合して一体となった都市を形成すべきものとしています。

学園都市を標榜しての４町合併は比較的早い時期に実現しましたが，その学園都市開発事業は東広島市及び広島県だけで進めるにはあまりにも大規模であったため，地域振興整備公団に事業要請を行いました。事業は，昭和51年の事業認可から平成７年までの19年間を要しましたが，これと併行しての東広島市の関連事業の実施によって現在に至っています。ご存知のように，広島大学の統合移転は昨年度で完了となりました。この事業の進展と共に東広島市では，都市づくりの骨格である街路などの主要幹線道路網の整備や，区画整理，宅地開発などの市街地の整備，あるいは公共下水道などの生活環境の整備に継続的に取り組み，その成果としてその姿を街へと変貌させつつあり，図書館・運動公園などの文化体育施設の整備によって都市としての潤いをも醸し出してきました。

市制施行後20年余ということは，人で言えば成人に例えられますが，こうした事業への取り組みの成果の一例として，昨年の東洋経済新報社調査では全国664都市中，成長力が第３位，住みよさが53位にランキングされるなど，都市づくりは未だ中途ではありますが，全国的にも注目を集める都市に成長していると言えるのではないかと思います。

今後も残された各駅前等の市街地等の整備，特に西条駅前の整備に最大の力を入れて都市基盤整備に努めるとともに，高校教育の充実や総合的医療機能などの都市機能の充実に努め，広島大学地域共同研究センター・広島テクノプラザ・産業科学技術研究所を中心とした地域産業の高度化を進める産業開発支援機能の向上を図るとともに，これらの及ぶ範囲の広域化を図るため，東広島呉自動車道など市のみならず広島県中央地域の活性化に役立ちたいと考えています。

また，公的開発に続く民間開発によって今後も人口の増加が続くことが予測され，今まで以上にきめ細かく日常の生活に必要な道路・河川・下水道などの生活基盤整備を進めながら，多様で魅力的な生活空間の創出に努め，遊空間・アミューズメント施設・賑わいのある広域的な商業サービスの拡充を促していきたいと考えています。

一方，広島大学門前街である下見地区の学生街づくりは，学生，教職員の都市生活の充実を図るとともに市民との交流の場となることを目的として，昭和62年から地権者の方々と協議を重ねてまいりました。その結果，道路・上下水道等の基盤整備は着々と進み，平成10年には完了する予定です。

また，良好な町並みをつくるため，地区計画制度により建物の建て方等についてルールを定め，徐々に市街地が形成されつつあり，平成８年３月には農住組合による学生マンションも建設され，さらには学生街の核となるダイエーも来年秋のオープンを目指して整備が進められることとなりました。

このように，特に大学周辺のハードの整備については概ねその姿が現れており，学生街１号線（キャンパスモール）や上寺家下見線の整備を急ぐことが何より重要になってきています。しかし，何より住んでよかったと思える街となるかどうかはその街の持つ雰囲気であり，平成22年を目標年次とした第３次総合計画の基本構想においても，引き続き「人間と自然の調和のとれた学園都市」を都市像とし，『静かで心の安らぐようなやさしいたたずまいがあり，まちづくりに主体的に取り組む市民の姿や美しくさっぱりとした街角がいたるところに見いだされ，市民一人ひとりが安心して豊かな精神生活を送り，創造的な活動を積極的に呼び起こすような文化的，教育的な空気に満たされている都市で，地域の一体的な発展にも貢献する内外に開かれた都市』を将来の都市のイメージとして掲げております。

中でも，中心的基本目標としている「国際学術技術研究都市」の形成に向けては，今後大学や企業等を育てる土壌づくりが特に必要と考えています。ハードが揃っただけではその器が出来たに過ぎず，真の学園都市づくりには大学をはじめ各種試験研究機関そして企業を地域に根づかせ，これらを地域の大切な財産として一体となって守り育てるという環境づくりが必要です。そうした一例としては，３年前から「学園都市づくり交流会議」を設置して活動を開始し，徐々に実績を挙げつつありますが，こうした地道な努力を重ねていく中で，大学や企業を活かし育てる意識が醸成されていくものと考えています。

最後に，都市づくりは誰かがどうするからできるというものではありません。西条駅前土地区画整理に見られるように，そこに住む人・働く人・営む人・訪れる人・憩う人が各々の立場を超えて，自分の故郷としてどうしたいか，そして何をするかが大事であり，地域や大学を活かし育てる動きが市民活動或いは学生活動として動き始めたときに，はじめて真の学園都市のスタートに立ったと言えます。

共に今及び将来の「学園都市」を担う一員として，特に総合科学部では各学部のいわゆる「教養教育」を受け持たれていることから，学生・大学関係職員の皆さんの地域や大学を通して，或いは個人の生活を通して，より一層「まちづくり」への参画・ご協力をいただければと期待しております。